

『君と出会えるその日まで』

泉鏡花『夜叉ヶ池』より

萩谷 至史

【時】

現代。世界中で環境汚染による気候変動の影響が発生していた。舞台となる村がある地域でも、昨年より異常な気温上昇が観測されている。雨もほとんど降っておらず、至る所で干害が起こっていた。

【登場人物】

百合・・・夜叉ヶ池の竜神との誓いの鐘を撞き続けている。妊娠三ヶ月。
晃・・・百合の夫。百合とともに誓いの鐘を撞いている。

拓也・・・農業ベンチャー、フューチャーアグリ社長。真理子の夫。
真理子・・・農業ベンチャー、フューチャーアグリ社員。拓也の妻。

鹿見・・・村の有力者。百合の叔父。

穴隈・・・この地区より選出された国会議員。

畑上・・・村長。

白雪・・・夜叉ヶ池の竜神。千蛇ヶ池の「君」と恋愛中だが、先祖が人間と結んだ誓いにより池を出ることができない。

セン・・・夜叉ヶ池に住んでいる魚。白雪の世話役。

ツク・・・夜叉ヶ池に住んでいる魚。

サザ・・・夜叉ヶ池に住んでいる魚。

使者・・・千蛇ヶ池に住む魚。「君」の手紙を白雪に届けている。

ベニちゃん・・・かつて百合が飼っていた鯉。お墓に埋められていたが、その上にフューチャーアグリ施設が建てられてしまい、今は百合の夢にのみ現れる。

【1】

明転。

舞台奥には、鐘楼をモチーフとした櫓が立っている。

白雪が一人。彼女の身体の一部には綱が巻きついている。この綱は、鐘を吊るしている綱とつながっており、鐘が震えると、その振動がその綱を伝って白雪へと届く。

鐘が鳴る。

白雪

今、君は何をしていますか？元気ですか？今、私は君の声を聞くことはできない。君はとても遠くにいるから。私は、君との誓いによって、君と結ばれている。けれど、君の声が欲しい。そんな誓いだけじゃ不安だから、君の音が欲しい。

鐘が鳴る。

白雪

午後六時。今日二度目の鐘が鳴る。あの鐘をぶら下げる鳥がつついた蔦葛のような脆い綱は、わたしに結ばれたこの綱を通して、私を、震わせる。……君の声を求めて近づこうとしても、私は、私に結ばれた、この一本の綱のせいで動けない。

鐘が鳴る。（鐘楼を見る）

白雪

今、君は何をしていますか？元気ですか？……私のこの赤く燃え上がるような感情は、この鐘の振動によって封じ込まれてしまう。今、何していますか？元気ですか？……遠く、宵の明星が煌々と、赤く輝っていた。あの星も、何光年と離れた星に会いたくて、心を燃やしているのかもしれない、なあ。

【2】

山の麓の村。二人はその村の中心から少し離れたところに住んでいる。家の前には、

夜叉ヶ池という大池を水源とした川が流れている。

晃と百合がその川の前でトマトを食べながら、夜空を眺めている。

百合　ねえ、宵の明星がとっても赤い。

晃　それ聞いたことある。なんだっけ？

百合　金星のことだよ。

晃　東京にいたときは、ゆっくり星を見上げてるってこと、なかったなあ。

百合　ここでは見放題。

晃　赤いね。

百合　赤い。

晃　金星ってこんなに赤かったっけ？

百合　燃えてるんだ。

晃　何に？

百合　恋、とかだったらロマンチック。

晃　燃えすぎだよ。

百合　……だから今夜もこんなに暑いんだ。

晃　雨が全然降らないのもそのせいかな。

百合　川の水、だいぶ減ってきたよね。

晃　二年連続の雨不足なんて、相当異常だよ。村でも断水始まるらしいよ。

百合　大丈夫なのかな……。

晃　百合は大丈夫？

百合　何が？

晃　さっきの鐘の音、元気がなかったよ。

百合　そんなことないよ。

晃　調子悪い時はわかるよ。

百合　さすが。

晃　ここにきて三年。毎日百合の鐘の音聞いているんだよ。わかるよ。

百合　……暑いんだもん。

晃　大変な時は代わるから言って。

百合　ありがとう……。

晃 鐘撞きの分担、考え直さないとね。(百合のお腹に触れる) この子のためにも。

百合 けど、私もやるからね。晃がここに来てくれる前は、毎日やってたんだから、いきなりやらないってなると、調子狂っちゃいそう。

晃 わかった。けど、無理は禁物ね。毎日三回、ちゃんとやらないといけないんだから。

百合 朝六時と丑三時はちよつとしんどいかもしれないけど、午後六時のだったら平気。晃 あとでちゃんと考えよう。

百合 誓いを破ったら竜神様の封印がとけて、この国は水の底だからね。

晃 そうなったら、百合にも、この子にも会えなくなる。

百合 それは困る。せつかく宿ったんだから、この世界を見せてあげたいな。

晃 ここから大きくなっていくんだよね。

百合 私も想像できない。

晃 この異常気象、今年で終わるかな……。

百合 せめて、この子には、少しでも不安のない世界に生まれてきてほしい。

間。川が優しく流れる音がする。

晃 今年も野菜、ちゃんとできてよかったね。

百合 ちよつと小さいけど。

晃 味は最高だよ。こんな味がぎゅつとしたトマト、東京でアパート暮らししてたら絶対に食べられないよ。

百合 最初にここ来た時も同じこと言ってた。

晃 あの時は、ただの旅行のつもりだったんだけどな。何でいるんだろ。

百合 何それ。

晃 冗談だよ。おかげで毎日充実してる。感謝してます。

百合 私に、野菜に？

晃 半々くらい。

百合 野菜の比率高すぎ。

晃 だって、美味しいじゃん。

百合 まあ……。

晃 世の中は全然野菜が採れてないって聞くよ。スーパーの野菜も、異常に高い。

百合 ネットニュースに出てたよ。この村。

晃 なんて？

百合 フューチャーアグリの話。水不足のせいで予想の二割くらいしか収益上がってなくて大変だつて。農業するためにこの村に来たのに、これじゃあねえ。

晃 ここは良かった。野菜だったら最低限、僕と百合で食べる分は取れるから。

間。川が優しく流れる音がする。

百合 今日ね、またベニちゃんの夢を見た。

晃、それを聞いて、無言で百合を抱きしめる。

百合 （晃から離れる）大丈夫だつて。

晃 悲しいやつじゃなかった？

百合 うん。長い長い川があつて、そこをベニちゃんと私が泳いでるのね。私は、泳いでるって言うか、漂ってるって感じだったんだけど。川下に向かって、しばらくの間ぶわぶわ流れにのつて、気づいたら、人間の私が鯉になって鯉のベニちゃん人間になった。

晃 水の流れに逆らつて泳いだ鯉は竜になるけれど、水の流れに身を任せた鯉は人間になるのかな。

百合 ちょうどここみたいじゃない？川上には竜が住む夜叉ヶ池。川下には人の住む住宅地。

晃 鯉になるのって、どんな感じ？

百合 えら呼吸してた。

晃 そりゃそうだ。

百合 あと……言葉をしゃべれなかった。

晃 鯉だもんねえ。

百合 もどかしかったよ。伝えたいことはたくさんあるのに、私にできることは、ただ、ベニちゃんに向かって身体を振り回して、水を震わせるだけ。

晃 ベニちゃんは何か言ってた？

百合 私が何を言いたいかわからなくて困ってた。

晃 普段俺たちが鯉を見てるときってそんな感じだよね。なんかこっち見てるけど、何言いたいんだろうって。

百合 ……いつまで、ベニちゃんの夢見るのかな。

晃 もう、十分謝ったよ。大丈夫。

百合 じゃあなんで、ベニちゃんは出てくるの？私が約束を守れなかったから恨んでるんだよ。

晃 じゃあ、その代わりに竜神様との約束を守っていこう、今の俺たちにできることをしていこう。

百合 そうだね。

晃、百合、退場。

【3】

拓也と真理子の家のリビング。一人、書類を前に頭を抱えている拓也。

そこに真理子が入ってくる。入った瞬間、部屋の温度が低いことを感じ、リモコンで冷房の設定温度を上げる。

拓也 あ……。

真理子 二十三度は低すぎ。エアコンの設定温度は二十七度って言ったでしょ。

拓也 今年は良くない？気象庁も認める異常気象だよ？

真理子 こうやってみんなでエネルギーを無駄遣いするのが異常気象の原因なんだから。地球の平均気温は、

拓也 (真理子の言葉を遮って) 百年後には2〜3℃上昇するっていうデータがあるんだよ。

拓也、大きくため息をつく。

真理子 水不足でも農業ができるようなシステムに関して、色々調べてみたんだけど、ど

れも膨大なコストがかかるみたい。私たちの規模の会社で導入できるようなのはなさそうだよ。

拓也 そっか……。

真理子 今日の投資家さんとの話はとうだった？

拓也 またダメ。これからこの気候変動が悪化していくかもしれないって中、農業の会社に出資はできないって。

真理子 ……そう。

間。

真理子 今日、正樹が小学校行きたくないってこぼしてた。

拓也 え、どうして？

真理子 フューチャーアグリ社長の子供ってかわれるんだって。まだ小学二年生だから、みんなそういうのストレートに言っちゃうんだよ。

拓也 ……そっか。

真理子 「そっか」って何？

拓也 そんなに睨むなよ。

真理子 睨んでないから。

拓也 去年この村に来た時は村おこしの救世主みたいな扱いしてたくせに。こうなった途端にこれだよ。正樹の学校のことも、どうせ親たちが家でいろんなこと言ってるんだろうよ。

真理子 ……これから、どうするつもり？

拓也 わかってる。

真理子 いや、質問に答えてよ。

拓也 ……。

真理子 ちょっと、社長でしょ。

拓也 ……異常気象は予想してなかったからなあ。

真理子 またそれ。異常気象、異常気象、異常気象。去年から、ずっと。だったらなんなの？「異常気象かー、じゃあしょうがない。死ぬかー」ってことにはならないでしょ？実際これからどうするの？去年も雨が降らなかった。来年もそうかもしれ

ない。再来年も、その次も。そうでしょう？誰も否定できないでしょ？二酸化炭素の排出量も三十年前と比べて、

拓也 （真理子の言葉を遮って）三十年前と比べて倍以上になってる……だから、考えるんじゃない。これからを。

真理子 東京に戻らない？正樹の学校の件もあるし、私だって近所さんから「可哀想な人」みたいな目で見られるの、もう限界。

拓也 設備と社員はどうするの？

真理子 このままじゃお金が出ていくだけだよ？。

拓也 ……。

真理子 「我が社は、新しい技術を使った未来の農業経営を目指します。最新式のバイオテクノロジーとIT技術がうんぬんかんぬん」

拓也 「この土地は昔から農業が盛んです！気候も水も土も、全てが野菜を作るためにあるかのようなんです！」って、村長が言ってたんだよ。実際、これまでの気候だった……。

真理子 だから、私たちが考えなきゃいけないのは「これまで」じゃなくて「これから」でしょ……昼間ね、村の人たちが夜叉ヶ池に向かってぞろぞろと歩いてたの。何かなと思って聞いたたら、池に住む竜神様に雨を降らしてもらうようお願いしに行くんだって。やばくない？神頼みって、今何時代？

拓也 何かやらないと気が済まないでしょ。

真理子 だったらもつと現実的なアクションあるじゃん。エコバッグ使ったり、エアコンの温度高めに設定したり……わたしすっごく気をつけてるんだからね。

拓也 知ってる。

真理子 気をつけてるのに……なんで私たちがこういう目に遭わなきゃいけないの？バチが当たるべきは神頼みなんかには逃げる村長じゃない？

拓也 まあ……。

真理子 ま、何はともあれ、今度の村長さんへの直談判はしっかりやりましょ。何としても補助金もらわないと。

拓也 うーん……。

真理子 どうしたの？

拓也 今まで散々行って、何の結果も得られてないんだけど。

真理子 やらないよりはマシでしょ？

拓也 多分。

真理子 多分？だめだよ、あの村長、優柔不断なんだから、どーんと強気で行かないと。

拓也 うん。

真理子 ね？ね？資料ももつと集めとく。

拓也 ……うん。

拓也が席を立つ。

真理子 どこ行くの？

拓也 ちょっと、仮眠とらせて。

真理子 ……おやすみ。

拓也が退場する。

間。鐘が鳴る。

真理子、イライラして音が聞こえてきた方を見る。

真理子 暑い。

エアコンの温度を下げる。

真理子 ……はあ。

鐘が鳴る。

【4】

夜叉ヶ池の中。センとツクが話している。

セン 今日もきたよ、人間。

ツク 知ってる。それだけならいいんだけどさ、何かこの池に色々投げ込んできてるじゃん。あれ何なの？

セン 捧げもののつもりじゃない？ああ、もう、池を汚すのほんとやめてほしい。白ちゃんの部屋の掃除もあるのに。仕事増やさないでよ。

ツク 白雪様のお世話係も大変だね。

セン ほんとほんと。「私を竜神と思わないで、クラスメイトみたいなもんだと思ってね！よろしく！」なんて言われたからさ、そんな感じの距離感で接したら、気軽に頼みごとしまくるようになって。

ツク そんなこと言いつつ楽しそうだよ。

セン そんなことないって。最近また、千蛇ヶ池のあの人に会いたい欲が高まってきててさあ、たまに機嫌悪くなるんだよ。

ツク それは……まあ、白雪様もかわいそうだよな。

セン それに振り回される私もだいぶかわいそうだけどね。

千蛇ヶ池よりの使者が大急ぎでイン。

使者 姫様！姫様。

セン ああ、お疲れ様です。

使者 セン様、姫様に、姫様に！

セン どうしたんですか、そんなに慌てて。

使者 この急ぎ方、わかるでしょう？どんな速達郵便よりも急いで届けなきゃいけない手紙です！剣ヶ峰、千蛇ヶ池からです！

セン あの人からの手紙？

使者 そうです！急いで運んできました！日照りのせいで干上がってる場所があったから迂回したんですが、そしたら道に迷ってしまつて……。

セン 白ちゃん！白ちゃん！千蛇ヶ池から手紙だつて！

白雪、大急ぎでイン。

白雪 見せて！

使者 これです。

白雪 ああ、やっと届いた！ありがとう！

使者 それだけ喜んでいただけると、お届けした甲斐もあります。では。

セン お気をつけて。

ツク お見送りしましょう。

白雪 じゃあね！

ツク、使者、退場。

白雪 （受け取った手紙を読む）前略、白雪様。

最近日照りが続きますね。こちらの池の周りに住む人間たちも困っています。氣候変動というらしいですね。そちらはお元気ですか？手紙のやり取りも楽しいですが、ぜひ、早くお会いしたいものです。が、まあ、先祖代々の言い伝えとあらば、仕方ありませんね。私は待ちます。何十年だろうが、何百年だろうが、あなたは強い絆で結ばれているので何も心配はしていません。お返事、お待ちしております。

白雪、遠く、千蛇ヶ池の方を眺める。

白雪 ……行こう。

千蛇ヶ池に向かおうとする。

セン ダメだからね。

白雪、不服そうに振り返る。

白雪 意地悪。

セン ダメ。

白雪 私が何十年我慢してると思ってるの？この世界に生まれた時から、運命で結ばれた

あの人に、一度も会えてない。想像できる？

セン 私は普通の魚だからなあ。

白雪 ああもう、何なの？何で？

セン わかってるでしょ？

白雪 ……わかんない。

セン 嘘。

白雪 わかんない、っていうか、理解できない。もう限界。

セン だけどね。

白雪 昔、人と水と戦って、この里の滅びようとした時、越の大徳泰澄が行力で竜神を夜叉ヶ池に封じ込んだ。竜神の言うには、人の溺れ、地の沈むのを救うために、自由を奪わるは是非に及ばん。その代わりに鐘を鑄て、麓にかけて、昼夜に三度ずつ撞鳴らして我を驚かし、その約束を思い出させよ。鐘の撞くことを怠るな。一度でも忘れると、立処に、大雨、大雷、大風とともに夜叉ヶ池から津波が起こって、全てを水の底に葬り、竜神は思うままに天地を馳する……もう、何回唱えたかわかんない！私はそんな誓い、した覚えないんだからね？

セン ご先祖様がしちやった誓いだから。

白雪 先祖がやった誓いを、なんで私が守らないといけないの？

セン 誓いって、そういうもんよ。

白雪 誓いじゃなくて呪いだよ。こんな話、気にしてるのは、実際に鐘をついてる百合ちゃん晃くと、その他ちよっぴりくらいなのに……。

セン そのうちみんなすつかり忘れるよ。人間は、進化の過程で脳は肥大化したけど、それを超える物事を記憶しなければいけなくなった。そのせいで、色んなことを忘れるんだよ。誓いもいつかきつと忘れるって。それまでの辛抱。

白雪 いつまで？

セン それは……わかんないけど。その日まではちゃんと守らないとダメだからね？もし、白ちゃんがあつちの池に行こうとしたら、この国を飲み込む大津波が起きる。そうしたら人間は

白雪 水の底。

セン だから、鐘が鳴ってるうちはダメ。

鐘が鳴る。

セン ほら、今日もちゃんと聞こえた。

白雪 ……会いたい。

セン 聞こえたでしょ？鐘の音。

白雪 （耳を塞いで）聞こえない。あーあー、聞こえない。

鐘が鳴る。耳を塞いでいても、その振動は綱を伝って白雪の身体を震わす。

白雪 ……私は、行く。

セン 感じたでしょ？音の震えはいくら耳を塞いでいても、鐘を吊るす綱を伝って、伝わるんだよ。こつちとあつちをつなぐ糸電話。

白雪 糸電話なんて……二十一世紀にもなって。通信手段は進化してるのに。

セン 誓いの手段は進化することはないんだよ。ただ、過去に決めたことを繰り返すだけ。

鐘が鳴る。

白雪、セン、退場。

【5】

村役場の村長の部屋。拓也と真理子が村長の畑上のところへ支援を求めにやってきたが、そこに村の有力者の一人である鹿見が居合わせ、口論になっている。

畑上 仰ることはわかります。

真理子 仰ることがわかったなら、村長さん、その先は、どうするんですか？

畑上 ええと……。

真理子 「この村の気候は農業に最適です」って、そう言っていましたよね？

畑上 本当なんです。

拓也 その言葉を信じて、私たちはここに来たんです。私たちだけじゃない。たくさんの社員も。あなたの言葉を信じて。

畑上 けれど、それは、その、異常気象が起こることは想定していなかったわけで……。

真理子 補償してくださいよ、補償。あなたの言葉がなければ、今頃私たちは、東京で平和に暮らしてたんですよ。

拓也 社員のみんなにも不安と不満が溜まっています。

畑上 そうですね……少し考えてみます。

鹿見 ちよっと待ってください。村長、なんで補償なんかする必要があるんですか。

真理子 当然の権利ですよ。

鹿見 勝手にこの村に来て、勝手に商売始めて、うまく行かなかったからって補償しろって、虫が良すぎませんか？

拓也 このビジネスがうまく行ったら、村おこしにもなるから歓迎すると言ってたんですよ？

鹿見 その言葉を踏まえて、ここにくることを選んだのはあなたたちです。そんなことに、村民の税金を勝手に使われたらたまったもんじゃない。

真理子 税金なら、私たちだって払ってるんですけど。

鹿見 おたくの社員と家族合わせても数十人分にしかない。それでよくそんなこと言えますね。

拓也 困った人を救うのが政治でしょ？

鹿見 よそ者ビジネスマンに何がわかる。

真理子 あ、差別！学校でもそうやって、東京から来た私たちや社員の家族のけものにされることがあるみたいです。あ、そうだ、村長さんそれも教育委員会にちゃんとやっておいってください。

畑上 ええ、そうですね……。

拓也 で、補償は？

鹿見 村長、そんなの、許しちゃダメですよ。それに、その前にやる必要があるでしょう。私たちは村民全員のためになることを、最優先に考えなければいけません。老人引き連れて池に祈りに行ってる場合じゃないんですよ。

真理子 そうですよ、そんな場合じゃないんですよ。

畑上 そうかもしれません。

鹿見 今後の断水の件について早く検討しないと。村民の生活がかかってますから。

拓也 それも大切ですけど、一方で、こういう人間もいるということを忘れないでくださ

い。

畑上 わかってます、ええ、わかってます。

穴隈が無遠慮に入ってくる。

穴隈 なんだ、揉め事か？

畑上 穴隈先生！

真理子 誰？今、大事な話をしてるんですけど。

穴隈 申し遅れました。私、衆議院議員の穴隈大輔と申します。

真理子 議員さん？ちようどいい、話を聞いてください。

穴隈 どうされました？

拓也 私たち、フューチャーアグリという企業のもので。

穴隈 おお、最近こちらでビジネスを始められた企業さんですよ。存じております。この前ネットニュースで拝見しました。この度は大変なことになりましたな。

拓也 今、その件で、村に補償金をお願いできないかを相談してるんです。

穴隈 なるほど。

鹿見 税金でそんなことをするのは間違ってます。

真理子 今あなたに話してないから。ねえ、議員さん。

鹿見 失礼ですよ。

畑上 まあまあ。

拓也 このプロジェクトはこの村のためでもあるんですよ。私たちが有名になれば、村の財政だってきつと潤います。

鹿見 簡単には決められません。

拓也 なんであなたが口出しするんですか。

鐘が鳴る。

畑上 ああ、鐘の音です。六時になりました。皆さま、すみません、本日の窓口業務は終了の時刻です。

真理子 何言ってるの、緊急事態でしょ？

畑上 しかし、私にも生活がありまして……。

拓也 私たちにもあります。

畑上 もう、時間ですし。今日のところはお引き取りください。いただいたお話は検討しておきます。

真理子 鐘！ね！そうそう、この際だから言うけど、この鐘もちよっと気味悪いんですよ。

夜中の鐘のせいで子供が起きちゃう時もあるし。

畑上 まあ、でも、昔から続いていることですし、ねえ、鹿見さん。

鹿見 え？

畑上 鹿見さんの姪っ子さんが今は撞き手になってるんですよ。

真理子 まあ、そうなんですか？（小馬鹿にしたように鹿見を見る）

鹿見 （過剰にむっとして）いや、私も、鐘なんか必要ないと思いますよ。

畑上 え？

鹿見 伝統だからってダラダラ続けててもしょうがないんじゃないですか？

拓也 そうですよ。

鹿見 もう誰も信じていないですし。

拓也 何のメリットもないじゃないですか。

穴隈 そうですなあ。確かに、皆さんのおっしゃる通りだと思います。

真理子 ですよね！

穴隈 村長さん、これは問題ですよ。最優先でなんとかしたほうがいい。

畑上 いや、それよりも、断水の件をなんとかしないと。

穴隈 住民の皆さんの不安と不満は第一に取り除かなければなりません。皆さん、今後のことについてはこちらでよく考えておきますので、しばしご辛抱ください。本日のところはお引き取り願えますか？

拓也 よろしく願いますよ？

拓也、真理子、鹿見、退場。

穴隈 なかなか大変なことになってるな。

畑上 今後のことは考えておきますって、どうするんですか？

穴隈 いいアイディアがある。

畑上 何ですか？

穴隈 雨乞いをするんだよ。

畑上 ……は？

穴隈 今、この状態において、この村に必要なものはなんだ？

畑上 住民に十分な水を供給することです。

穴隈 違う。

畑上 ……え？けど、雨乞いって……。

穴隈 水を供給するための手段として真っ先に雨乞いを提案するようなバカがどこにいます。弥生時代じゃないんだぞ？一番必要なものは、「住民を一つにまとめる何か」だ。

畑上 それで、雨乞い……？

穴隈 そうだ。そして、その雨乞いの儀式をするために、鐘を撤去してしまおう。

畑上 え？

穴隈 見てたか？揉めてた住民が、鐘の話題になったら意見が一致しただろう？

畑上 鐘については、もともと不満を持ってる住民の皆さんも多かったですね。

穴隈 まずは、住民の利害が一致するような政策で、ポイントを稼ぐ。

畑上 いきなり撤去って、脈絡が無さすぎるのでは？

穴隈 だから雨乞いなんだよ。この村で、雨乞い祭りを始める。そこで、竜神様と新しい誓いを結ぶんだ。新しい誓いには新しいシンボル。そのシンボルを、鐘を撤去してその場所に作る。未曾有の事態を乗り越えるために、住民一丸となって新しい祭りを始めるなんて、夕方の地域のニュースとか新聞の地方欄とかが好きそうな話題じゃないか。それで、世の中の流れも味方につけるんだ。

畑上 けど、それは現状の根本的な解決にならないのでは？

穴隈 そもそも、現状を根本的に解決する必要があるか？

畑上 え？

穴隈 さっきのような対立、本気で解決しようとしたら、必ずどこかで不満が出る。小さな不満の声は大きな不満の声を生む。大きな不満は支持率に出る。支持率の低下は次の選挙の結果に出る。

畑上 はい……。

穴隈 安心は安全よりも価値がある。正しくなくても、皆が安心して生活を送れることが

一番大切なんだ。緊急事態に、みんなを団結させ、安心をもたらすリーダー。素晴らしいじゃないか。そうだろう？気候変動すら私たちは味方につけるんだ。さ、そうと決まれば、具体的に話を進めよう。さっきの人たちにも協力してもらおうじゃないか。

畑上、穴隈、退場。

【6】

夜叉ヶ池の中。

セン・ツク・サザが村民によって池に投げ込まれた大量の硬貨を回収している。

ツク ああ、また、こんなところからも出てきた。

サザ どんどん出てくる……。

ツク ちよつと考えれば分かるだろ。こんなの、俺たちにはなんの価値も無いって。

セン 自分に価値があると思ったら、相手にも価値があると思っちゃうんでしょ。だから短絡的に色々なものに食いついて、その結果環境がーと言っちゃってんの。

ツク 迷惑。

サザ (拾ったコインを見て) これどうする？

ツク 姫様に向けられたお供え物でしょ？

セン 白ちゃんがこんなの欲しがると思う？

ツク だよねえ。

白雪、イン。

ツク あ、姫様。

サザ だいぶ綺麗になりましたよ。

白雪 ありがとね。

ツク ちっちゃい子が間違って飲み込んだりでもしたら大変ですからね。

白雪 全く、人間ってやつは。

サザ で、どうするんですか。

白雪 え？

サザ 人間は、水が欲しいからこういうのを投げ込んでくるんです。

ツク 水不足、人間の世界で結構深刻みたいですね。

白雪 そんなのは知らん。

サザ みんな困ってますけど。

白雪 もし日照りの原因が私だったら、そりゃ私の責任だから何とかするのが筋だけども、今回は異常気象でしょ？しかもなんか、一説によると、人間の活動が原因の世界的な気候変動のせいみたいじゃん。私に、地球を何とかするほどの力はないよ？

サザ そうですけど、

白雪 （遮って）そんなことはどうでもいいんだけどさ、次の手紙はまだ来てない？

セン まだだよ。

白雪 あああ、もう！じれったい！もうさ、みんな水に困ってるんなら、私がこの池を出て大津波を起こすのが一番いいんじゃない？

セン そんなことしたらみんな死んじゃうって言ってるでしょ。人間は、私たちと違って、進化の過程でエラ呼吸を捨ててきちゃったんだから。

白雪 勝手に捨てただけだよな？水無しでは生きていけないくせに、水を捨てて、陸に上がった。そんな、勝手な都合をなんで私たちが考慮しなきゃいけないの？人間が進化さえないければ……。

セン 進化したから人間になったんだよ。

白雪 人間の味方なの？

セン んなわけないじゃん。あんな、猿のさらに気持ち悪いバージョンみたいなもの。

白雪 じゃあ、少しは私の味方をしてくれないじゃん。

セン 誓いがあるって言ってるでしょ。

白雪 たかが鐘の音なんかに……。

セン ただの鐘の音じゃないよ。白ちゃんにも、心はあるでしょ？

白雪 あるよ。心があるから今辛いんじゃない。それが何？

セン 心は心でも、心の臓。この世に生まれてから、絶えることなく身体の間々まで赤い赤い血を運ぶ、大切な。

白雪 それが何？

セン 日に三度、絶えることなく打ち続けてる鐘は、人間が生きている証拠。人間世界の心臓の音。その音を水の底に沈めないように、白ちゃんの先祖は自分で誓いの綱を結んだんじゃない。

白雪 切り落としちゃえばいいんだよ。糸電話も、糸が切れてしまえば何も届かない。

セン 心臓を繋いでる血管は、切った瞬間に致命傷になる。

白雪 私の心はすでにズタズタだよ？

百合の歌声が聞こえてくる。

白雪 あ……

百合の歌が響く。

白雪 百合ちゃん。

百合は晃の横で、お腹の子に向けて子守唄を歌っている。
二人から白雪は見えていない。

白雪 ……いいよね、人間は、会いたい時に会いたい人と会えるんだもん。

歌声が響く。

白雪 鐘を鳴らしてる張本人も、呑気なもんだね。これ、なんの歌？

セン これは、子守唄。子供を眠らせようとする歌。

白雪 百合ちゃん晃くんの子供って、産まれるのはまだまだ先でしょ？

歌声が響く。

セン 愛だね。この世界には、無数のそういうものがある。誰かと一緒にこの今が永遠に続いてほしいと思いながら、その人と生きる未来を思い描くんだ。

白雪 私も、「君」との未来を思い描き続けてる。

セン それも、愛だね。

白雪 けど、いつその未来がやってくるかはわからない。

セン 誓ったんでしょ？二人の未来を。

白雪 誓いは、永遠？

セン 白ちゃんのご先祖さんと人間がした誓いを見ればわかるでしょ。誓いっていうのは関係を永遠に続けようとするためのもの。続けようと思えばいつまでも続く。

白雪 あのひととの関係が未来永劫続くには誓いというものを信じないといけないけれど、人間が誓いを信じて鐘を撞いている限り、私はその人に会うこともできない。

百合 この子も、鐘をつくことになるのかな。

お腹に手を当てる。

晃 そうだね。竜神様との誓いを受け継いで、この村に未来をもたらし続けるんだ。

川が優しく流れる音がする。

晃 水は綺麗だね。

百合 うん。

晃 この子も、こんな綺麗な水の中に漂ってる。

百合 私たちもそうだったよ。この世界に生まれてくる前は誰かのお腹の中で、水に漂ってたんだ。

晃 想像できないな。

百合 私は、時々、自分が産まれる前に見た夢を思い出す。胎児の夢。私は母のお腹の中にいた。母も、かつては祖母のお腹の中にいた。祖母も誰かのお腹の中。その誰かも、誰かのお腹の中……。

百合は、子宮の中で世代を遡っていく。遡行する時の中で、羊水に包まれた世界に、過去、幾度となく鳴らされた鐘の音が鳴り響く。

晃は退場している。

百合 そうやって、ずっと遡っていくと、翼が生えて、肺呼吸を忘れて、鱗やヒレが生えてくる。太古の海の中では、私はただ、世界の震えと誰かの震えを感じるだけで……。

羊水に満たされた子宮の中は、いつの間にか、海水に満たされた原初の地球まで遡っている。その中を様々な魚たちが泳いでいる。

鯉のベニちゃんが登場する。

地球という子宮の中で魚類にまで時間をさかのぼった百合は、ベニちゃんと会話することができる。

百合 ベニちゃん、今夜も出てきたの？

ベニちゃんは泳いでいる。

百合 ねえ、あなた淡水魚でしょ。なんで海にいるの。

ベニちゃん 生き物は昔はみんな海にいたのよ。

百合 現代人じゃん。

ベニちゃん 現代魚ね。

百合 現代、ギョ？

ベニちゃん 現代の魚と書いて、現代魚。

百合 わかりにくい。

ベニちゃん そういえば、百合ちゃんは小学生の時は漢字テストが苦手だった。

百合 中学の頃は得意になってたよ。

ベニちゃん 私は百合ちゃんが中学生になる前にお墓の下に入っちゃったから、知らない。

まあ、今はお墓の下にすらないんだけど。

百合 ……ごめん。

ベニちゃん ああ、別に、そんなに責めてないって。

百合 だからいつまでも夢の中に出てきてるんでしょ？毎年忘れずにお墓参りするってい

うベニちゃんとの約束を守れなかったから。

ベニちゃん 約束なんて、その時の考えでするものでしょ？だから、時代によって守れなくなることもあってあるさ。

百合 約束って、そんないい加減なものじゃないよ。

ベニちゃん 気にしすぎ。

百合 お墓が消滅するって、人間の世界だと相当やばいことだからね？

ベニちゃん 魚の世界だと、お墓を作ってもらえるってだけでスーパージョッキーだから。

百合 ……。

ベニちゃん ま、びっくりはしたけどね。気づいたら、なんかよくわからん近代的な建物が上に建ってるーってなって。

百合 ……。

ベニちゃん けど、あの建物、フューチャーアグリ、だっけ。みんなの役に立つもんなんでしょ？だったら、しょうがないかな。

百合 本当？

ベニちゃん ほんとほんと。はい。

ベニちゃん、手（ヒレ）を差し出す。

ベニちゃん 怒ってないの印の、握手。

百合が差し出されたベニちゃんの手を握ろうとする。その瞬間に、かつて耳にしたフューチャーアグリ建設時の工事の音が聞こえる。百合は現実に戻される。ベニちゃんは消える。

百合 あの日は、ベニちゃんの命日のちょうど一ヶ月前だった。いつものように、朝六時の鐘を鳴らしてご飯を食べた後、突然聞こえてきた、この、工事の音。それは、私がベニちゃんを埋めた秘密の場所で響いていた……絶対に誰にも見つからないような茂みの中、だったのに、なあ……。

工事の音。

【7】

ベニちゃんのお墓があった方を見つめながら、家の外でぼんやりしている百合。
鹿見がやってくる。

鹿見 ここは静かだねえ。

百合 おじさん、またきたの？

鹿見 元気か？

百合、警戒している。

鹿見 おいおい、親戚に向かってその態度はないだろう。

百合 絶対戻らないからね。

鹿見 頼むよ。

百合 いや。

鹿見 鐘撞きなんかやめて、こっち戻ってこいって。

百合 ……。

鹿見 ちょうど今、村長が秘書を探してる。俺が村長に口利きすれば安定した仕事もなるとかなるぞ。

百合 別にやりたくないから。

鹿見 お前もずっとそうしてるわけにもいかないだろう？

百合 大丈夫。暮らしていけるだけのお金はあるから。

鹿見 何かあったらどうするんだ。

百合 私一人じゃないし。

鹿見 じゃあ尚更だ。お腹に子供もいるんだろ？今、村長大変なんだよ。緊急事態で、やんなきゃいけない大切な仕事がたくさんあるんだ。

百合 私も、あるから、大切なやること。

鹿見 鐘撞きのどこが大切なんだ。今、村に必要なのは現実的に水不足を解決することなんだ。

百合 おじさんが村長になるためにもね。

鹿見 ……。

百合 村長選挙、近いもんね。

鹿見 ……今の村長は優柔不断すぎる。非常事態において必要なのは、強いリーダーシップだ。村人を守るのは、時には思い切った決断ができる強い意志。村を守るためには次の選挙で私が勝たないといけない。

百合 自分で頑張りなよ。

鹿見 そのためには、お前の力が必要なんだ。村が大変な時に姪が手伝いにきたなんていったら、お前の評判は急上昇だぞ？

百合 おじさんの評判も、ね。

鹿見 田舎って怖いところなんだよ。身内のうち一人でも変なことしてる奴がいたら、すぐ広まるんだよ。お前が何もしないで村のはずれに住んでること、みんなが知ってるんだ。いや、何もしないならまだいい。鐘を鳴らしてるってこともみんな知ってる。毎日毎日鳴る鐘。あの、不気味な鐘の音。「あらー鹿見さん、最近お元氣ですか？百合ちゃんも」。「百合ちゃんも」そうやって人が言う時の、あのちよつと人を馬鹿にしたような目……あの目が……。あの鐘さえ無ければ……。

百合 そのせいで村長になれないって言いたいんでしょ？

鹿見 いつまでも言い伝えになんかしがみついてるんじゃない。現実では、現実の問題が起こってるんだ。鐘じゃこの異常気象は解決しない。水不足は解決しない……何にも、解決しない。

百合 ごめん、もう時間だから。

百合、その場から去ろうとする。

鹿見 おい、待て。

百合 夕方六時。鐘を鳴らす時間だから。

鹿見 そんなのもうどうだっていいだろ。

百合 誓いだよ？昔の人が、竜神様に誓った。

鹿見 竜神様が何をしてくれた？困った時には何もしてくれない。そんな神様のために延々と鐘をつき続けるのか？

百合 誓いだから。

鹿見 誓いなんて、その時その時の考えでするものだ。時代によって守れなくなることだってあるだろう。

百合 ……そんなこと、ないよ。

晃、イン。

晃 何してるんですか？

百合 あ……。

百合、逃げる。鹿見追おうとするが、晃に止められる。

鹿見 もうやめてくれ。村の外から来て。

晃 誰も興味を持っていない村の伝統をみんなの代わりに守ってるんです。

鹿見 村も発展しなきゃいけないんだ。外から来た人間が勝手に伝統伝統と……鐘が鳴り続ける限り、村は変わらない……知ってるか、今夜から断水が始まる。

晃 だから、何ですか？

鹿見 そうだろうな。そっちには川があるもんな。問題はないよな。けど、私たちはそうはいかないんだ。二人暮らしの老人夫婦が、断水に備えて重いポリタンクを抱えて水を貯めたりしてる。

鐘が鳴る。

鹿見 東京の喧騒を離れて、静かな田舎でヒーローごっこしながらのデトックスライフもいいが、こっちにはこっちの現実があるってことは忘れるな。

晃 ……。

晃、退場。

鹿見、退場。

自宅で断水に備えて黙々と給水タンクに水を汲んでいる拓也と真理子。蛇口から出る水をタンクに入れる音が静かな部屋に響いている。

拓也 まだ必要？

真理子 わからない……けど、一晩だったらこんなもんか、な？

拓也 (満タンのタンクを運びながら) 重い……。

真理子 大丈夫？最近運動不足なんだから、腰とかやらないようにね。

給水タンクに水を汲み終える。水の音が止まる。

間。

真理子 受けると思わない？儀式だって。

間。

真理子 最先端の技術を引っさげて村にやってきた救世主のはずだったのにな。

間。

鐘が鳴る。真理子と拓也は鐘の方を見つめる。

拓也 こいつが……こいつが……水、この、水が……水さえ、あれば！

拓也の苛立ちが爆発する。タンクをひっくり返して何度か蹴りつける。

真理子は、それを見ている。

拓也、我に返る。

間。

真理子 正樹に儀式のこと話したのね。そしたら、「何の意味があるの？」って。そりゃそ

うだよね。雨が降らなかったから雨乞いしますなんて馬鹿げてるって、小学二年生でもわかる……けどさ、これって、私たちの未来のためではあるんだよ？だから、そういう風に伝えたの。正樹は全然納得してなかったけど、ね。

間。

真理子 これって、私たちの未来のためではあるんだよ？

拓也 わからない。

真理子 何それ？

拓也 知らないよ、そんなの。何が何のためかなんて、未来に何が起こるのかわかんないのに、そんなこと分かるわけじゃないじゃん。

真理子 何が起こるかかわからないなら、せめて希望を持たせてよ。

拓也 そうだよ、希望を持たせてよ。（自分に言い聞かせるように）……希望を。

真理子 ……どうしたの？

拓也 希望を、持ったっていいよね？

真理子 ……希望を持ったっていいよね？

拓也 いいよね？

真理子 いいよね？

間。

拓也 儀式、成功させよう。

真理子 村の人たちに協力して、少しでも村のコミュニティの中に入れていけたら、補助金ももらいやすくなるかも。

拓也 そうだよ、この異常気象が終わった時には、村がビジネスに協力的になってくれるかも。

真理子 雨乞いの儀式は、未来への投資。

拓也 やるしかない、か。

真理子 やりましょう。鹿見さんが言ってた。私たちは、若い新しい思想を持ってる。だから、変化の少ない村に辟易してる若者へ影響力があるって。

拓也 これで俺たちに共鳴してくれる村の優秀な若者がいたら、ヘッドハンティングするのもありだね。

真理子 よし、そしたら、やるべきことは一つ。

拓也 私たちの未来のために。

拓也、拡声器を手にする。

【9】

村の中心部。群衆の前。拓也と真理子が演説を始める。

拓也 みなさん、株式会社フューチャーアグリの本拠地拓也です。私は、最新のテクノロジーでこの村の農業を盛り上げていきたい、そう思って、二年前、多くの社員と、そして、社員であり、パートナーである真理子と、東京からこの村にやってまいりました。しかし、昨年から続く異常気象で、私たちのビジネスは大打撃を受けてしまいました。私たちは現在、苦しい現実に向き合っています。しかし、そんな時だからこそ、私は希望を見たい。この村の皆さんとなら、新しい雨乞いの儀式を通じて一緒に希望を見ることが出来る気がします。

拍手が起こる。

真理子が拡声器を受け取る。

真理子 地球環境問題は、人類共通の課題です。これから私たちが行おうとしている雨乞いの儀式は、ただ雨を呼ぶための儀式ではありません。地球環境の現状を皆で共有し、これからの地球を、私たちの未来を考えるためのセレモニーです。そんな、日本を、世界をリードするムーブメントを、私はパートナーの拓也と、そして皆さんと、この村から起こしていきたい。フューチャーアグリは農業の未来だけでなく、私たちの未来を開拓していきます。

鐘が鳴る。

真理子 みなさん、この鐘の音、すっかり耳馴染みだと思います。村の伝統ですね。確かに、伝統は大切です。しかし、私たちは、未来を開拓するためには、慣れ親しんだ環境から一步外に出る必要があるのです。

拓也 ダーウィンは言いました。変化できる者は生き残れるのだと。この鐘の誓いが竜神様と結ばれてから、数百年の時間が流れています。この伝統は記憶に残して、私たちは新しい世界に進んでいきましょう！

拍手と歓声が起る。

【10】

百合と晃が家の中で話している。

晃 聞いた？鐘を撤去するって話。

百合 うん、聞いた。

晃 すごい盛り上がりってるよ。村の人も、フューチャーアグリの社員も、至る所で演説してる。

百合 ……。

晃 けどさ、撤去なんて勝手にできないでしょ？

百合 それが、できちゃうんだよね。

晃 なんで？

百合 この鐘は、私たちのものじゃないから。

晃 え？

百合 この鐘も、この鐘がある場所も、村のものなんだ。だから、村が撤去するって決めたら、私たちは何にもできない。

晃 そんな……鐘を鳴らせなくなったら、竜神様との誓いはどうなるの？この誓いを、この人たちは、何百年も守ってきたんでしょ？それに、鐘の音が止まったら……。

百合 全てが水の底……。

晃 どうする？

百合 守ろう。ここを。

晃 向こうは大勢いるよ？

百合 ……。

晃 村長とか、国会議員さんとかもいるらしいよ？

百合 ……だけど、誓いだから。もう私は誓いを、約束を破りたくはない。時代が変わったって、守り続けなきゃいけない誓いだってある。ベニちゃんとも約束した。もう誓いは破らないって。

外から拍手と歓声が聞こえてくる。

百合と晃がそっちの方を見る。

【11】

夜叉ヶ池。白雪とセン。

白雪が狼狽えている。

白雪 どういうことなの？なんとかならないの？

セン なんとかしたいんだけど……。

白雪 千蛇ヶ池から手紙が届かないなんてこと、これまであった？

セン 使者が来られないんだって。

白雪 なんで？

セン ここに来るまでの道に濁流があるって。

白雪 濁流？村は水不足なんでしょ？

ツクがやってくる。

ツク ダメです。こちらから向かって手紙を受け取ろうかと思ったのですが……。

白雪 何が起こってるの？

ツク 濁流です。

白雪 なんで水不足の川に濁流が起こるの？

ツク 濁流は濁流でも水の濁流じゃないんです。

白雪 じゃあなんなの？

ツク 声です。

白雪 は？

つく 声です。人々の声が、濁流となって……聞こえませんか。止まることがない、物凄い勢いの声の流れが。

鹿見、畑上、村民の前で演説をしている。

鹿見 村民の皆様、断水にご協力いただきありがとうございます。私たちは、人類史上、いや、地球史上最大の敵である気候変動と戦っています。私たちにとっては強大すぎる敵かもしれません。しかし、私たちの村には、この非常事態において、竜神様という心強い味方がいます。……え？ああ、そうですね。池に皆さんが祈りを捧げていることは知っています。それでも効果がないのは、新しい誓いが必要だということなのでしょう。一日三回の鐘の誓いを終わりにして、新しい誓いを、雨乞いの儀式で結びましょう。みなさん一丸となって、雨乞いの儀式をするのです。ね、村長。

畑上 私たちの夜叉ヶ池の伝統はの鐘は、遠い昔から続く大切なものです。これを撤去してしまうのは惜しい氣もしますが……。

鹿見、畑上からマイクを奪う。

鹿見 地球環境は悪化の一途をたどっています。今後もいたるところでこのような異常気象が発生すると言われています。不安ですよね、みなさん、不安ですよね？そうですよね？ね？だから、そのために、皆で一致団結をして、この村の未来を創っていきましょう。私たちはその第一歩として、古い誓いのシンボルである鐘を取り外すセレモニーを執り行います。皆様、ぜひ、この村が前進する瞬間を、目撃してください！

人々の歓声が上がる。

その声は大きくなり、やがて濁流のように村を覆っていく。

白雪 あの人間たちは、何を叫んでるの？

セン 未来という言葉がたたくさん聞こえる。

白雪 未来は、あんなに叫ばないと手に入らないものなの？

ツク 姫様と新しい誓いを立てると言ってますよ。

白雪 だから、私はそういうことはできないの。勝手に決めないで。

ツク しかし、人々の、人々の声の流れは、もう止められそうにありません。

人々の熱狂の声が聞こえる。

白雪 そんなこと言われても……また、私に新しい綱が結ばれるってこと？また新しい誓

いに縛られるってこと？

ツク かもしれません。

白雪 もう嫌だよ。(叫ぶ人々に向けて) いい加減にしてよ！

セン いくら叫んでも、白ちゃんの声は届かないよ。

白雪 なんで？私は我慢してるのに。人間のために、我慢してるのに。人間は次から次へと勝手なことを言う。私は、あの人の手紙すら読めないんだよ？

人々の熱狂の声が聞こえ続ける。

白雪 この音、は、私の綱を震わせない。私の身体を震わせない。もう、もういいよ。私

は、私の幸せを取る。

セン 待って。

白雪 なんで？あの人にも会えるし、この声も消すことができるし、一石二鳥だよ。

セン だめ！

白雪 なんで？

鐘が鳴る。人々の叫びにかき消され、かすかにしか聞こえてこない。

セン ほら、鐘が、鐘が鳴ってる！

白雪 聞こえない！音の濁流のせいで、聞こえないよ！

セン 聞いて！

白雪 聞こえないよ。私には、音の濁流しか。

セン 直接感じて、音を、音の震えを。

セン、白雪に綱を握らせる。

綱を伝って聞こえてくる鐘の音が白雪の身体を震わせる。

セン 人間の鼓動を。

白雪 どうして今、私は、この憎い綱を握りしめているの？……ああ、確かに感じる。声の濁流に混じって、鐘の音。

百合と晃がイン。二人で鐘をついている。

鐘が鳴る。

白雪 それでも、人々の声は大きくなっていく。鐘は鳴り続けていたけれど、言葉、が、それをかき消すように大きく村に鳴り響いていた。

【12】

百合と晃の家の前。

鐘の撤去に來た人々。拓也、真理子、鹿見、畑上を中心に、百合と晃を取り囲む、

百合 絶対にダメ。

鹿見 村のためなんだよ。私たちに鐘はもう必要ないんだ。

晃 雨乞いの儀式なんて、鐘があってもできるでしょ？

鹿見 いや、だめだ、古い誓いを終わらせて、新しい誓いを始めるというのが今回のコンセプトだからな。

百合 なんでもそんなことしなきゃいけないの？

真理子 あのね、正直、迷惑してんの。早朝も夜中も御構い無しにガンガンガン。百合 けれど、竜神様との誓いがあるから……。

拓也 正直、これ以上雨が降らないと、私たちのビジネスはお手上げなんだ。

晃 雨乞いをすれば雨は降るなんて、本気で考えてる？

鹿見 村のみんなで団結しようとしているところに、水をささないでくれないか？

百合 私たちの話も聞いて。

鹿見 お前が何と言おうと、この場所は村が管理している場所だ。お前らの主張は不当だ。

ね、村長。

畑上 あ、ああ。

穴隈がやってくる。

穴隈 困ったもんだね。

畑上 ああ、穴隈先生。

穴隈 そろそろ勘弁願えないかな。村民の声は聞こえただろう。これだけの人々が望んでるんだ。今、私たちは、この問題に団結して取り組まなければいけない。

百合 鐘をつくのをやめたら、みんな水の底だよ？

穴隈 そんなのはただの伝説だろう。確かに、ここには夜叉ヶ池を水源に持つ川が流れている。君達二人が生きる分には水は十分足りているのかもしれない。ただな、非常事態にそんな自己中心的な主張を押し通せると思うな。

真理子 野菜だって、その小さな畑にいびつな小さい野菜がなってたけど、そんなもの、自分たちのお腹を満たしたらそれでおしまいでしょ？こっちは、成功したらみんなのところへ野菜が届くんだよ？将来的にはこの国の野菜の自給率をあげることもできる。

穴隈 この二人をはじめとする村民たちと君達二人。どっちがこの村に利益をもたらすと思ってる？生産性がある行為だと思ってる？

百合 それでも、鐘を鳴らし続けないと。

穴隈 鐘を鳴らすことに意味なんてあるのか？鐘の音なんか意味があるのか？鐘の音が何かを生むのか？

晃 鐘の音は、鳴る。

穴隈 は？

晃 鐘の音は……鳴る。

穴隈 ふざけたことを言うな。

鹿見 そうだ非国民！

拓也 非国民！

真理子 非国民！

人々の熱狂の声が聞こえる。

夜叉ヶ池の中の白雪、セン。

白雪 ねえ、濁流はまだ終わらないの？

セン それどころか、ますますひどくなってるよ！

白雪 そんな……。

穴隈 二人を抑えろ！

集まっていた村の人々が百合と晃を押さえつける。

穴隈 （人々に指示を出す）皆、鐘楼に上がれ！作業を始める。気をつけてな！

白雪 もう、許せない。

白雪、巨大なハサミを取り出す。

セン どうする気？

白雪 これを切れればいい。こんな、鳥のつづいた蔦葛のような、こんな綱、こんな誓い。

白雪、自身に結ばれた綱を切ろうとする。

百合　だめ！

穴隈　この村の未来のためだ。

セン　そんなことしたら、みんな水の底だよ。

白雪　エラを捨てた人間が悪いんじゃない。いらなと思ったらずぐに捨てる。何が必要になるかわかんないのに。何が起るかわかんないのに。

白雪、綱にハサミを入れる。しかし、どんなに力を入れても綱は切れない。

真理子　何が起るか分からない、から、色々変えないといけないの。変わらないといけないの。新しい村を作りましょう。

穴隈　何もできない人間はただ黙って私たちがやることについてくればいいんだ。

白雪　切れない！こんなにボロボロの綱なのに！

セン　当たり前だよ、誓いなんだから。こっちから一方的に切るのは無理だって！

白雪　早く、これを誰か、切って！大昔からの誓いなんて、私は守りたくない。人間の音なんて聞きたくない。私は、君の声が聞きたい！

セン　無理だって！

白雪　けど！

真理子　もう少し！

鹿見　これで新しい歴史が、この村に刻まれることになる。数百年ぶりに、再発進だ。拓也　そのスタートの場に、こうやって関わる事ができて、嬉しいです。

鹿見　こちらこそ。あの停滞の象徴のような鐘の音は、もう鳴ることはありません。真理子　それだけでもう一気に未来が開けた気がしますね！

セン　ねえ、白ちゃん、見て、あれ！（騒動の方を見る）

白雪　え？

百合　ああ……。

穴限 鐘が落ちるぞー！

鐘が切り落とされる。

熱狂。人々は退場する。

静けさを取り戻したその場所で、百合と晃は呆然と鐘楼を見ている。

百合 そうして、鐘が、落ちた。何百年もこの場所で世界を震わせ続けていた鐘は、熱狂に身体を躍らせたたくさんの人々に乱暴にトラックに積み込まれて、どこかへ運ばれていつてしまった。

間。

百合 次の鐘は丑三つ時、午前二時半。その時に、私たちは鐘を鳴らすことはできない。そうしたら……。

白雪 うそ？うそ？え、これ、まじで？

セン 切れた……。

白雪、綱を身体から取り去る。

白雪 お、おおお！これで会いに行ける！これであの人のところへ行ける！これであの人の声が聞ける！あの人に触れることができる！

セン やったね！

白雪 会って何を話そう。たくさんあるんだ、話したいこと。ありすぎて、うまく喋れるかな。あ、おしゃれもしないとだ。わ、考えることもやることもたくさんあるじゃん！

セン 時間は無限にあるから大丈夫。これからはいつでも会いに行けるんだから。

白雪 今何時？

セン 夜七時。

白雪 早く時間にならないかな！いつもなら、鐘の音が私を震わせる丑三つ時。私はいつ

ものようにおとなしく夜叉ヶ池にいる。けれど、今日はいつもと違う。時間になっても鐘の音は私を震わせない。人間は誓いの時間の中で、心臓を鼓動させることをやめた。そして、その時に、私は本当に気づく。ああ、本当の自由を手に入れたって。ああああ、今何時？

セン まだ七時だって。

白雪 早く、早く、ああ、早く！

白雪、外出の準備を始める。

百合 早く、早く、時間が、たっていく。私たちは、その時間、何をすればいいのかわからなくて、晃と一緒に川沿いに山を登って、夜叉ヶ池までやってきた……煌々と照る月を反射する水面は世界の全てを受け入れているかのように静か、だった。水、が、綺麗だ、なあ。

【13】

真夜中、百合と晃は夜叉ヶ池のほとりにいる。

白雪は引き続き、外出の準備中である。

百合 夜叉ヶ池の竜神さま、私たちは誓いを守ることができませんでした。これまで響かせ続けてきた鐘の音を、私たちは、もう、届けることができなくなってしまいました……洪水は天地を覆うんでしょうか、私たちの未来は、水の底に沈んでいつてしまっているんでしょうか……（晃に）水の底に……本当に、沈んじゃうのかな。

晃 （百合のお腹に触れる）この子にも、この世界を見せてあげたかったな。

百合 七ヶ月……遅かったなあ。

晃 七ヶ月……あつという間だと思ってたんだけどな。

百合 これが、みんなの出した結論なんだよね。みんなが選んだ未来なんだよね。

晃 ……。

百合 人間なんか大嫌い。

晃 百合も僕も人間だよ。

百合（叫ぶ）人間なんか大嫌い！

白雪、その声に反応して、二人の方に目をやる。

百合 ……冗談。

晃 変なこと言うと、この子にも聞こえちゃうよ？百合と繋がってるんだから。

白雪（切れた綱を拾い上げる）もう、こっちは、繋がってないよ。

百合 こんな世界に産まれてこなくてよかったって思ってるかな。

晃 出てきたいって思ってるよ。

百合 本当？

晃 最後くらい楽しいこと想像しよう……この子がお腹の中で大きくなる。

百合 そしたら、ああ、今お腹蹴った、とか、そういう話をするんだ。

晃 そしたら、俺はそれを羨ましいって思う。

百合 そしたら、お腹に触らせてあげる。

晃 そしたら、ああ、ほんとだ、動いてるのが伝わるって、なる。

晃・白雪 生きている鼓動が、

白雪 ……もう伝わらないよ、この綱は、切れてしまっているから。

拓也と真理子。自宅にて。

拓也は雨乞いに関する書類とにらめっこしている。

真理子 今日は静かにスッカリ眠れる気がする。

拓也 夜中に鐘も鳴らないしね。

真理子 今日ぐらいゆつくりしたらいいのに。

拓也 雨乞いの儀式、鹿見さんとしっかり詰めていかないよ。

真理子 乗り気じゃん。

拓也 なんか、未来が見えた気がするよ。

真理子 まだ何も変わってないよ。

拓也 そうなんだけど……けど、これから変わるよ。

真理子 変えて、行こうね。

拓也 うん。

真理子 あ、けど、

真理子、エアコンのリモコンを手にして、設定温度をあげる。

真理子 エアコンの設定温度は二十七度ね。これも未来への投資だから。

拓也 はいはい。

真理子 静かな夜だね。こんな日には、何か素敵なことが起こりそう。

夜叉ヶ池。嬉しそうにセンが入ってくる。

セン 準備できた？

白雪、百合たちの方を見つめている。

セン どうしたの？

白雪 うん……。

セン あと一時間で白ちゃんは自由の身だよ！私も世界が水浸しになれば、どこでも移動できるようになる。旅行でも行こうかななんて友達と話してるんだ。日本一周なんてのもいいよね。地図はいらないよ。ほとんどが水なんだから。

白雪 ……。

セン 白ちゃん？

白雪 そうだよねえ。自由だよねえ。

セン え？

白雪 そうなんだよ、私は、もう直ぐで会いに行けるんだよ。あの、千蛇ヶ池に住む、君に。私を縛る、綱がなくなったから。早く会いに行きたいんだよ。この夜叉ヶ池を出て、遠く遠く、千蛇ヶ池まで。長い長い距離を、水の流れを、抵抗を、全身に感じながら泳ぐ。最高だよ。しかも、人間たちの文明の痕跡が下に見えるんだ。立ち

並ぶ電柱をスラロームのようにかいくぐって泳いでみたり、都会のビル群で子供み
たいにかくれんぼしてみたりして。

白雪、話しているうちに、悲しみの気持ちが湧き上がってくる。

セン 大丈夫？

白雪 早く、会いたいなあ。会いに行けるまであと一時間……あと一時間、あと一時間、
（百合と晃に叫ぶ）あと一時間しかないよ。ねえ、あと一時間しかないよ。

百合 不思議だね。

晃 え？

百合 鐘を鳴らし忘れたらさ、いつでもこうなる可能性はあったんでしょ？

晃 ……うん。

百合 けど、そんな日が来るなんて考えてもみなかった。

晃 ……後一時間を切った。

百合 この子が安らかに眠れるように、子守唄でも歌ってあげようかな。

晃 いいね。僕も、それから、この世界の人たちも、安らかに眠れる。

百合 ひよっとしたら、竜神様にも届くかもしれない。

百合、子守唄を歌う。

白雪 聞こえてるよ。聞こえてる。けど、ダメなんだ、そんな音じゃ。あの、綱を伝って
私の身体を震わせるような鐘の音じゃなきゃ。私は気持ちを抑えることはできない。

白雪の耳に、心臓の音がどこからともなく聞こえてくる。
それは、百合と晃の心音である。

セン どうしたの？

白雪 この音は何？

セン え？

白雪 この音。

百合と晃の心臓の音が聞こえる。

セン これは、二人の生きてる音だね。

白雪 生きてる音。

セン ……白ちゃん、震えてる。

白雪 心臓の音は、綱を伝わらなくとも身体を震わせるものなの？

百合 時々、自分が産まれる前に見た夢を思い出すんだ。

晃 え？

百合 私は、水の中をただひたすらに流されていて、気づいたら時間を遡ってる。翼が生えて、肺呼吸を忘れて、鱗やヒレが生えてくる。そこではただ、言葉を使わずに、振動だけでコミュニケーションをとるんだ。

晃 この子と一緒に。お腹の中、水にプカプカ浮かんで。言葉を使えない。

百合 私たちは、また誰かのお腹の中に戻るのか。

晃 その想像、楽しい。俺たちも、この子と同じように、ぶかぶか浮かぶのかな。

百合 ……そうしたら、また、生まれ直せるといいなあ。

晃 大嫌いな人間がたくさんいる世界でも？何があるかわからない世界でも？

百合 ……。

白雪 今から私は君に会いに行くよ。百合ちゃんと晃くんは……しっかりと手を繋いでいてね。この国を飲み込む大洪水に、離れ離れになってしまわないように……仕方ないね。進化しちゃったんだもんね。エラとヒレの代わりに、色んなものを手に入れたちゃったんだもんね。……二人にエラとヒレがあったら、ダブルデートできたんだけどなあ。

間。時計の秒針の音が聞こえる。

白雪と百合の声が重なる。

百合はお腹の中の子供に向かって、白雪は千蛇ヶ池に向かって、それぞれ声を届け

ようとする。

白雪・百合　今、君は何をしていますか？元氣ですか？今、私は君の声を聞くことはできない。君はとても遠くにいるから。……もうすぐあなたのところへ行きます。未来永劫、一緒に心を震わせていきましょう。

白雪　……行ってきます。そして、さようなら。

暗転。

しばし心臓の音が空間に鳴り響く。それは、二人の心音であり、村に生きる人々の心音であり、地球上に生きる全ての生物の心音である。

幕。